広島市医師会

健康メモ

知っておくべきコンタクトレンズの危険

広島市医師会理事
五日市中野眼科医院院長　中野　豊

コンタクトレンズには、眼鏡と比較して幾つかの利点があります。例えば、視野が広くて周辺部がひずんだりしない・見る物の大きさが変わらない・人と接触するようなスポーツに向いている・複雑な乱視や左右の度数が大きく違う場合でもかなり矯正できるなどです。

しかし逆に欠点も数多くあります。コンタクトレンズを一般の方が使用するようになって五〇年以上の歴史があり、材質や性能も初期のものに比較すると格段に向上してきましたが、異物を眼の上に載せているという基本は変わっていません。そのことによって起こるトラブルは、今後どれ程素材が改良されても無くなることはないでしょう。

日本眼科医会発表の集計では、コンタクトレンズ眼障害は女性が男性の四倍強であり、二〇代・三〇代が七〇%を占めていますが、四〇代以上も一三%となっています。障害の種類は非常に多岐にわたります。角膜（黒目）上皮の糜爛や剥離などの傷が十数%、角膜浸潤や潰瘍などの感染症が約一〇%、アレルギー性結膜炎や慢性の結膜充血が五〇%強、角膜新生血管が五%、角膜内皮障害や虹彩炎などの内眼疾患が数%などが主なところです。傷や感染症は治療が遅れると消えない混濁が角膜に残ってしまいますし、重症例では失明につながることすらあります。また、角膜内皮障害で細胞数が減少すると回復不能であり、最終的には角膜の透明性を失うことにもなりかねません。コンタクトレンズにはハード・ソフト・使い捨て（一日～一ヵ月）など数多くの種類がありますが、どのレンズを選ぶとしても「眼に良いレンズ」は存在しません。コンタクトレンズを使用する人は、先ず眼科での診察で、コンタクトレンズが使用可能な状態かを調べた上で処方を受けないといけません。また、指定された装用時間、使用期間、保存・管理方法などを守り、必ず定期検査を受けることも安全のためには必須の条件です。しかし正しい使い方をしていても、何らかのトラブルが起こる可能性があることを忘れないでください。

マイシティ　マイドクター
広島市医師会
www.city.hiroshima.med.or.jp